

一三八 『鳥取新報』記事

①大正七年九月二十三日付

東郷湖畔松崎を始め舎人村大字藤津並に浅津村及び花

わづ

見、東郷村の家屋は僅かに水面に屋根だけ現はし居た

いず

なかんずく

る始末にて孰れも家具一切を流失したり就中養生館及

きゅう

び旭館東郷館の如きは避難するに汲々とし家財は跡方もなく流失し唯家屋の形を存し居るに過ぎず依って各

ほと

や

戸とも殆んど投げ遣りの有様にて東郷湖の風致は全く

ちなみ

荒廃に帰したり因に養生館の如きは回復に二万円を要すべしと

②大正七年十月三日付

わい

東郷湖畔上の養生館の百畳敷大広間は畳建具浚はれ

ひたし

ちゅうぐ

廂まで水がついた、屋根と柱だけ残って居る、恰度泥

かぶ

水の中に柱を立てゝ其上に屋根だけを冠せた様に見える、東郷湖畔は全部荒廃に帰した。浅津方面、東郷川の沿岸の被害百二十町歩、市橋家の被害は五十町歩で

奥に行く程被害の度も多く（後略）……代議士奥田柳藏視察談

先般の洪水に際して各地の青年会員にして公共のた

すい
せき

めに尽瘁した事蹟は各町村によって現在調査されつゝあるのであるが今その一として東伯郡花見村青年会員の活動を紹介しやう。（中略）大字長和田には花見尋常小学校の可なり大きな建築物があるが羽衣石川は学

う

校の所在地を迂回して流れて居る、その日朝から降り

あふ

続いた雨は川に溢れ堤防を破壊して低地へ低地へと進んだが丁度午後五時頃になると学校の上手の堤防が切れて学校は激流の襲ふ所となつて烈しい瀬を現出した。是れより先、危険刻々に迫るや学校職員は重要書類の取片付け御真影の避難奉安等の為め学校に集合した、長和田青年も駆けつけた御真影は高地にある長伝寺に避難し奉た、する内堤防が切れて床下は激流とな

おびただ

つて土台の土が持ち去らるゝことが夥しい、無論橋梁

しず

は流失して了つてゐる水は長和田、門田を浸して浸水

そこ

おく

家屋が多かった、乃で長和田、門田の青年は避難し後れた老幼を船によって避難させるに尽力した、幸に両村には死傷者を出さず、学校も倒壊を免れたが花見村

かい

では羽衣石に倒潰二戸二人の死者を出し埴見に全潰一

戸死者一人とを出した皆此川の禍する所であつた洪水
後此の川は川筋を替て田地の上を流れてゐるので両村
青年は堰止め工事を行ひ道路の改修等に少からぬ労力

まで

を捧げたので今日では可なり交通に支障なき迄になつて居る。

なお

尚此際のことである浅津の温泉地は地面が低いので甚だしい浸水を被つた温泉場に河田なつ一家四人が平屋建に住まって居た、老人と子供とは早く避難させて居たが夫婦は家に止まって何かの始末をして居た水は家の廂をも没せんばかりに上つて来た、今は猶予はならぬ近隣の二階に避難せねばと二人は船に乗って其家を離れると烈しい風雨は四五間の距離を操縦することが出来ぬ見る間に強い暴風に吹き流されて濁水氾濫し

もてあそ

しか

てん

た東郷湖上を木の葉如く弄ばれた、併し幸にも船は顛ぶく

覆を免れて花見村に漂着したのであつた花見青年は絶えず警戒していたから殆ど生気を失つて凍えて疲れ切

わらひ

つた彼等を介抱して藁火で暖める等面倒を見たといふことである。